



佐多 稻子

講談社版

おんな やど
女の宿

著者の了
解により
検印廃止

昭和38年1月20日 第1刷發行

著 者 佐 多 稻 子

¥ 360

發 行 者 野 間 省 一

東京都文京區大塚坂下町114
印 刷 所 豐國印刷株式會社

發行所

東京都文京區
音羽町3-19

株式
會社

講

談

社

振替東京 (3930)

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。 (和田製本)

© IneR Sata 1963

装幀 中島伸和

狭い庭	旅情	秋のうた	水	かげ	女の宿	目次
九七	八一	六二	四九	二九	九	

壺坂

一〇七

泥人形

一二七

色のない晝

一四九

人形と笛

一六七

祝辭

一七九

ある夜の客

一九五

幸福

二一九

佐多稻子作品集

女
の
宿

たれか、ひとがきている、年配らしい女の太い話し聲を耳にしながら私は、半睡の餘裕の中でそうおもう。地聲でがしや／＼としやべつてゐるのは關西辯だ。よその家で目を覺ました、というおもしろいも同時にして、しかしそこは友達の家だから、たれかひとがきているなら音を立てないでいよう、そんな氣持もすでに働いて、いつにない間接的な自分をあそばせるようにゆら／＼としている。もう朝も早くはない。廊下の外も雨戸を立てないであつたら、障子が明るく、すぐ次の臺所でこと／＼ともの音もしている。そういう氣配に、はつきりしてきた私の感覺が、臺所のもの音と、さつきからつづいてゐる女の聲の調子との間に、關連のないのを氣づき出した。食事の仕度をしてゐるらしいもの音はひそやかにしのばせてある。遠慮のない女の聲の調子が、それとちがう。そう氣づくと、誰かひとがきている、とおもわせた女の話に答える聲は聞えない。私は起き出して廊下への障子をあげた。

隣家と、裏側の家との境を黒い板塀で圍つた狭い庭は、關西ふうのちんまりとした作りで、一本の細い松と、堀ぎわの數本の篠竹にも、まだ直接の陽ざしがかかつてゐない。縁近く小さな石燈籠をおいて、そのそばに二三の盆栽がある。この庭をたてに添つてぬれ縁があ

つてそこを渡つてゆく先きに手洗がある。

ひた／＼ひた、とこきざみにスリッパの音がして、座敷の壁のうしろの廊下から、この家のあるじの田鶴子が割烹着姿でまわつてきた。朝の挨拶だからというようにちよつと改まつて、

「おはようございます。おやすみになりましたか」

と語尾をあげて結ぶように云つた。さつきから聞えていたのとまるつきりちがつて、田鶴子の聲は細くて優しい。結ぶように云われたけれど、大阪なまりだからそれは柔かく聞える。

「おはようございます。おかげさまで。さつきからだなたかお客さまだとおもつた」

「ううん、ちがう。おとなりの奥さんや。大きな聲ではるでしょう。おやかましゆうて申しわけございません。うちら、もう慣れてしもた」

受け唇を合わせて、につと笑つた。白い顔の額が丸くて、笑うと細い目がいよ／＼細くなる。まるで文樂の女の面に似ている。

私たちの聲を聞きつけて田鶴子の義妹の邦子も二階から降りてきた。彼女は小柄な身體にズボンをはいている。

「えらい、はやいお目覺めとちがいますのん？」

顔を上げたようにしてはき／＼とそう云う。

盆栽に水をやつている田鶴子が小聲になつて、

「おとなりの奥さんの聲で、目エ覺ましはつた」

「ああ」

邦子はなるほどというように、

「そう云えば、この前お泊りになつたとき丁度、おとなりさん、お留守やつたわな」

田鶴子にそう云つてから、私に笑いかけた。

「どうぞこれで、お懲りになりませんように」

邦子が云うように私がここへ泊めてもらうのは、今度が二度目であつた。彼女たちと知り合うようになつたのは、戦後のことで、婦人團體の活動のつながりからであつた。もつとも婦人團體といつても、田鶴子や邦子はそういう運動の先きに立つという人柄ではなく、むしろ、側面において、だから私の彼女たちとのつきあいも、どつちかという個人的な深まり合ひ方になつた。それに田鶴子が日本畫を描いているし、邦子がある新聞社の婦人記者であるという仕事に私と共通するものもあつて親交が増した。もつともそのきつかけとなつたのは、彼女たちに連れられて、京都、奈良の古寺巡りをしてからであつた。私が古寺を見てまわるなどということをおもひ立つたのさえ、彼女たちの誘ひがあつたからだつたけれど、それも彼女たちにしてみれば、私があんまりがさつなことを口走つたからにちがいない。私は神社佛閣を見てまわるなどということに、てれていた。佛像などはきらい、と云つたとき、田鶴子は顔を伏せて半ば獨り言のように云つた。

「それでも、きつと、一度ごらんになつたら、好きにならるわ。ええ、云いはるわ。今度

御一結しましょう。大和路を、ぼく／＼歩きましょうな。もみじの頃かてよろしいし、梨花の咲いている頃かてよろしいわ」

その言葉があんまり美しかったから、私は羞ずかしくもあり、嬉しくもなつたのであつた。

戦争中に夫の病死にあつてから、田鶴子は義妹の邦子と二人で、ひっそりと寺院まわりをしていたという事で、二人ともくわしかつた。そういう二人の暮らしが、戦争中とその後のはげしきを通つてつづいている。戦後すぐ新聞社に入つた邦子の方が今では義姉を支えているようなところがある。

ちよつとした用事で大阪へ来ることになつた私が、今度も田鶴子の家へ泊めてもらうのは、おたがい女暮らしの心易さもたしかにあつた。

「お茶はいりました。どうぞ」

邦子によばれて、廣い臺所を今ふうに直して食卓もおいた室にはいつてゆくと、いつときやんでいたおとなりさんの聲が、流し臺の上の窓の外に近々と聞えた。

「おとなり、マリちゃんの病氣で、騒ぎなんやわ」

邦子が云う。

「マリちゃん、どんなん？」

「マリ、死ぬらしいな」

田鶴子との話で私も、おとなりさんについて前から聞いていた話をおもい出す。

「ああ、あの奥さんね」

「そうですね。昨日も、ちよつと邦子さん来ておくれやす、云われてなにかおもつて行つたら、犬が病氣やて。とにかく年賀狀にかて、自分の名前と一緒にマリ子、つて、犬の名書きはる人でしよう。大騒ぎやわ」

「その後も株、やつてらつしやるの」

「そりやもう今は株で暮らしてはりますんでしよう。株が下がつてそれでも大さわざや」

「そのたんびに邦ちやん、呼びにきはる。邦ちやん責任重大やな」

「よう云わんわ。私かて株屋やないし、責任なんて持てはしませんわ。ただ、どないしましように、どないしましように、云わはるから、じいつと持つてなさつたらよろし、云うたのに、あぶない／＼云うて賣つてしまつて、あとになつて、損した／＼云うてるの」

そんな邦子たちの話が、聞えてくる、無智なひびきの感じられる太い女の聲にすつぱり合う。が、そのおとなりさんが、新地で舞子に出ていたときにひかされて、つい二年前までの長い歳月をそのひとりの旦那に圍われて暮らしてきたという、艶つばい色あいは浮び出てこないのだ。もう五十を越した齡で、娘の着るような赤い模様さえ着て、それがまた似合うというのも、その聲からは想像しようがない。

「何十年も、ひとりの旦那でつづいてきた、いうことは、どこか、ええところもありなさるんですわね。せやけどほんまに、わがまま娘みたいやな。癪が昂ぶると、若い女中の髪つかんで引きずりまわしはつたことがあるんですよ、一時はようそんなことがつづいて、私ら、

お手傳いさんの泣き聲聞いてほんまに辛かつたわ。邦ちゃんがその娘さんにちえつけて、今は人権いうものが保護されているんや云うても、その子才がまた、お父さんがお金借りてますから云うて、そんなひどいことされてもよう出てもゆかんの。いつでもおとなりの奥さん、新しいお手傳い入れるとき、何年分云うて、前金渡しなさるんですと」

いつか聞いたそんな話も、いよ／＼グロテスクにおもい出される。

ある會社の重役だったという旦那が亡くなって遺産分けのあつたときのこと、邦子たちから聞いた。旦那の遺産の中に、二百萬圓の株券がおとなりさん名義で残してあつた。それは遺言狀にも明記されていたことだったが、いよ／＼のとき、その株券は渡されなかつた。が、ちゃんと、二百萬圓の現金がとどけられた。

「そのときも、どないしましょう云うて、うちへ飛び込んで來られましてね。そりや株券で渡してもろうた方がいいに決まつてますわ。あのときは株がどん／＼あがつてるときでしたもの。二百萬圓の株は倍になつてたかもしれせんもの。せやから、向うさんは、ちゃんと現金にして持つてきやはつたんよ。先方の長男さん、じき／＼においででしたわ。おとなりの奥さんにしてみれば、目の前に二百萬圓の現金積まれると、それ逃がしたらどうかなくなつてしまうような不安もあつたんでしょう。私、その受取證代筆させられましたんよ。縁切り狀みたいなもんやつたわ。ちやつかりとうわ手やわね。向うさんじゃ元はとりはつたんよ」

東京にもこんな話があるのかどうか知らない。が、そのときの私には、話のすべてが、大阪という土地柄を感じさせられて、覺えていた。